

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

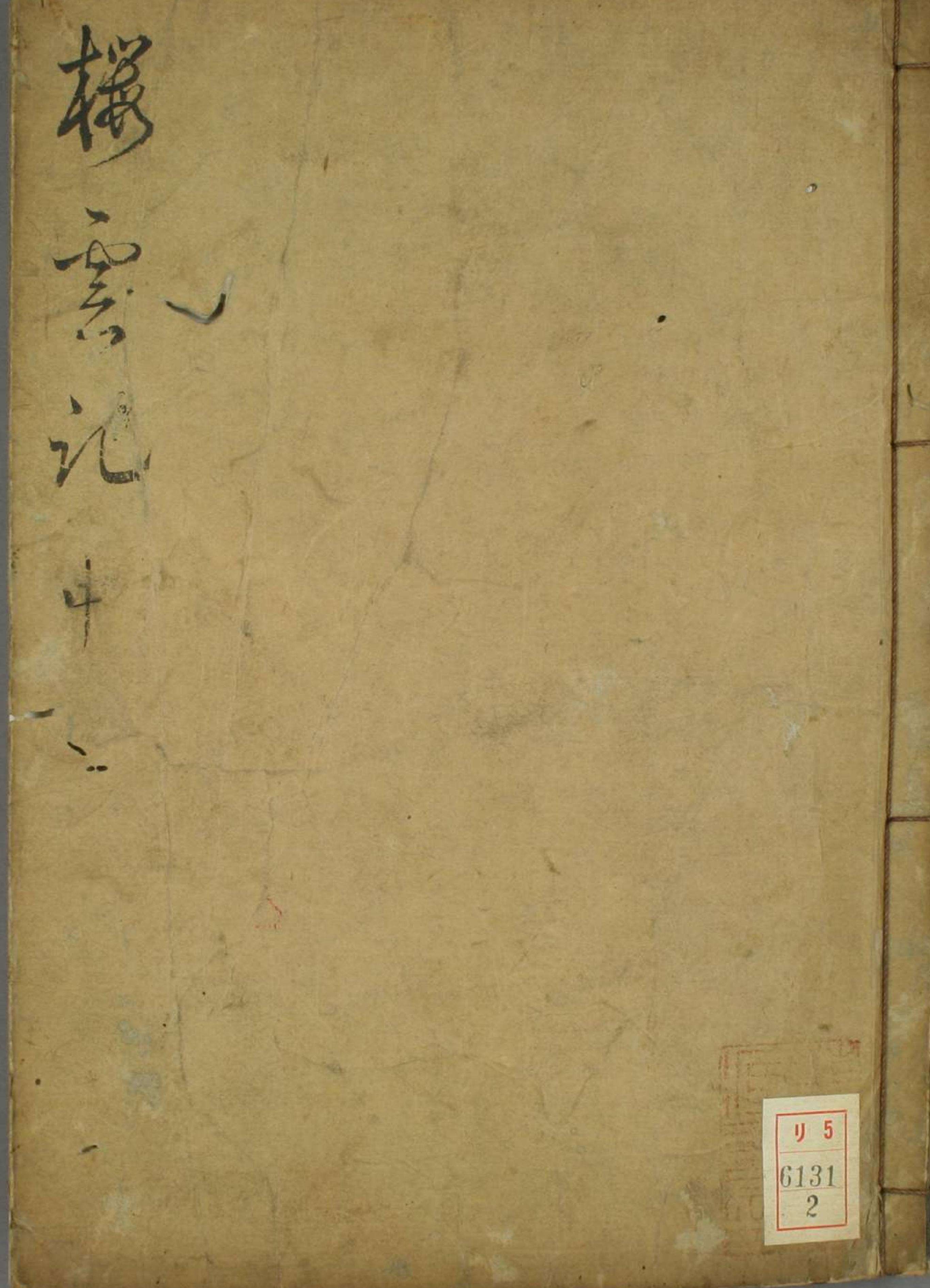
14

13

12

11

95
6131
2



リ 5
門禁卷
6131
2

櫻西書
元建

中相田
年正月廿四日

文海

周周

新局書
三月廿二日
印鑑
長男
忠武家

以式詔大輔賴魚為奥州管領入道：誠補佐ス同
八日奥州凶徒蜂起ス依之義良親王及顯家追伐
セント欲シ伊達郡藤口靈山ニ赴ク結城上野入
道源秀東海道熊堂ニ至ル同日右大臣公堅大納
言師基中納言実任從北京吉野ニ来ル同十七日
宰相宗惠於北京殺サル同廿一日徳大寺參議公
量參議親光皆於北京捕ラル各南朝ニ通スルニ
依テ十リ同廿六日於熊堂白川入道、忠武家

方相馬松鶴丸一族合戦終日ニ及テ雙方打死甚
多シ二月廿四日於常陸小田富岡山小田宮内少
輔治久常陸平大掾ト武家方佐竹義篤合戦同廿
六日小田ノ兵士夜討ス廿九日小田ノ軍破ル三
月中納言雅継大蔵卿菅在氏左大辨參議清忠吉
野ニ來ル此月金崎城没落義頭自害義貞嫡男尊良親
王モ自殺春宮恒良ハ京ヘ帰ル四月五日近衛閔
白経忠南朝ヘ來ル同月尊氏細川和氏ヲシテ公
家領ヲ略ス夏尊澄法親王勢州一瀬山ノ奥ニテ
詠ス

深山ラハヒトリ十出ソ時鳥我モ都ノ人バ侍
ラニ七月十四日頭家東彌九郎楠左近戻人ラメ
常陸国ラ擊ツ佐竹義篤吉原源戻人戦テ日ラ經
テ両方戦死スル者多シ九月十九日義良頭家及
結城入道西征セント欲シ奥州ラ發ス十二月十
二日上野国刀祢川ニヨヒテ合戦頭家敵ラ打破
テ齋藤実長武州三嶽住人ラ討捕ル同十六日武州薊山
安保原ニテ戦テ亦軍ニ勝ツ同廿四日至鎌倉小
壺松本前濱腰越所ニノ合戦ニ頭家利アリ新田
義興義貞次男北條時行頭家ニ馳加ル於是義詮戦負

テ 鎌倉ヲ出奔ス義良顕家則上洛武家方上杉挑
井伯賀入道敗軍ノ士卒ヲアツメコレヲ追テ上
ル三浦介心ヲ齧シテ武家方トナル今川範國遠
州ニ於テ馳加ル吉良滿義高刑部大輔三州ヲ發
シ濃州黒田ニ至ル土岐頼遠土岐山ヲ出皆以武
家方ニ加ル

延元三年北京暦正月濃州吉野原合戦同九三日
吉田内大臣定房薨ス師基任内大臣同月義貞義
助松山ヨリ出テ北国ニ威ヲ振テ京都ヲ攻ニト
欲ス二月四日高師泰細川頼春等京都ヨリ發向

六日至黒地川十四日勢州雲津川洲役川口所

ニ才ニテ合戦師泰等敗北廿八日於南都合戦京
勢得利至是義良吉野へ赴顕家河内国へ發向春
日少将顕信八幡へ出張三月八日ニ八幡并ニ可
州古市川原合戦南方ノ軍破同月尊氏以葛西安
藤權之助陸奥ノ守護トス五月泉州堺浦合戦顕
家戦破テ於安倍野討死年廿顕信新田義貞篠八
幡同廿八日持家、房八幡ニ發向六月師直八幡
ヲ攻破ル千時溝杣家兼同盛並ヲ南方ノ兵討取
国七月義貞黒丸城ヲ攻テ流矢ニ中テ死ス年卅

同月頭信叙從三位任陸奥守頭能叙從四位上任

伊勢守自是伊勢國司ノ始

藤原右資任伊豫守同月廿五日

義良親王尊澄法親王宗良親王以下皇子及北畠

親房頭信結城入道源秀欲赴東國至勢州八月十

七日勢州ヨリ出船九月十一日於伊豆崎逢難風

テ船タ、ヨニ或没ス義良皇子及頭信ノ船勢州

篠島ニ帰著ス結城入道源秀舟勢州安濃津ニ著

爰ニ於テ急病ラ得テ死ス親房ノ舟常洲ニ著岸

宗良親王并尊良ノ一宮ノ舟遠州白羽湊ニ至テ

則井伊ノ城ニ入懷良親王号牧官後為征將軍四國ニ著

後是鎮西ニ下向ス南朝ヨリ日野大僧正頼意為

勅使至篠島干時伊勢ノ神主ノ云ク此度難風ニ

逢テ數千艘ノ船破損ストイヘニ親王ノ舟故十

ツ此浦ニ著船感神慮奉悅僧正頼意詠ス

神風マミフ子ヨスラン與津浪賴ミラ懸ミ伊

勢ノ濱邊ニ此月於北京尊氏征夷大將軍ノ宣下

直義副將軍ノ宣旨アリ高師直任執吏職ラ其弟

師泰頃日振權威尊氏政務ラ直義ニカセテ令

執行直義ト師直兄弟ト不眞

興國元年北京暦二年尊氏去歲ヨリ高師秋ラ以テ伊

勢守護トス故国司北畠顯能ト合戦不止春宗良
井伊城ニ在リテ濱名橋、本ノ松原ノ邊ヲ遙ニ
見テ詠ス

夕暮ハミナトモ底モシラヌケノ入海懸テカ
スム松原

ハルクト朝ウシホノミナト船コキ出ル方
ハ猶カスミツ、宗良親王遠州ヨリ京師ヘ上ラ
ント欲ス味方ノ兵敗レテ吉野ヘ赴キ日ヲ経ル
時大納言為定詠ス

樓ハ心トムトモ返歌宗良

古郷ハコニミクトテモ三吉野ノ花ノ盛ライ
カ、見スラニ又宗良詠ス

アキラケキ御代ノ春シル鳶モ谷ヨリ出ル聲
キコユナル四月五日於南朝阿曾宗実ニ勢州朝
明郡ヲ賜地頭職ニ補ス同月十九日勅ヲ受頭信
奥州國司ト成テ白川ノ城ニ至ル同廿七日下總國
駒城没落於是一品官尊良子号宇津峯宮又称奥州言遠州ヨリ
奥州ニ下向ス慈編僧正神風和記三卷ヲ作テ献
ス白川親朝修理大夫ニ任ス五月五日宗良吉野

ニ在シ時准后ヨリ菖蒲ニソヘテ和歌ヲ贈ラル
ウキテワカ頼ム心ノ深キ江ニヒケルアヤモノ
根トハシラナン返歌宗良

ワカキ江モ今日ゾカヒアル。ヤメ申君カ心ニ
ヒクト思一ハ七月廿三日常州ニ於テ春日少
將小田治久兵ヲ起ス佐竹吉原戦テ敗北ス同月
義助黒丸城ヲ攻落ス其後義助破しテ信濃ニ至
ル土岐頼明入道号周義助ヲ討ニト信州ニ赴ク
義助美濃ニ至テ伊勢ニ赴キ吉野ヘ参ル秋ニ至
ニ宗良東国ニ笈スヘキト勅アリテ伊勢ニ至ニ
乗船遠州へ赴ク天龍灘ニ至テ難風ニ逢ニ従フ
船底没ス漸ク白羽ノ漆ニ著船干時詠ス

イカテホヌ物トモシラストニヤカタカタシ
ク袖ノ夜ノウラ浪井伊城ニ再ニ至リテ詠ス
馴ニケル再ニキテモ旅衣ヲル、アツニノ嶺
ノアラシニ七月十三日恒良親王薨ス十六歳八月九日南帝御
不豫十五日義良親王薨祚十二歳主上御脇風氣故
程十ク平復セント奏スル人アリ干時御製
露ノ身ラ申ノ枕ニラキ十カラ風ヲハヨモト

頼ムハカ十サ同十六日後醍醐帝崩_{ス年五}先帝

ノ女御_{ニ条道}平女 刺髮ス吉 蓮院慈道法親王ニテ受

戒ス干時慈道和歌ヲ詠シ尊圓法親王ニ送ル

思ニヤレフカキ涙ノ一シホモ色ニ出タルス

ミソメノ袖返歌尊圓

色替ル袖ノ洞ノカキクリ三餘所モ時雨ル、

神無月カ十九月六日源季光刺髮ス十月五日後

村上帝即位諱義良母准后廣子号新衛經忠ヲ

待賢門院先帝寵愛人也近衛經忠ヲ

関白トス師基任右大臣資次任別當洞院実世四

條隆資諸執奏ス太神宮奉幣使新帝御制衣

四ノ海ノ浪モ納ル印ニテ三ツノタカララ身

ニソツタユル

九重ニ今モニスミノ鏡コソ猶世ラテラス光

ナリケリ其比先帝ノ御硯ノ中ニ葵ノ二葉カツ

ラヌヲナシカサシト宸華ヲ染ラル、ラ見テ新

待賢門院詠ス、

カヒツ、モニ葉カツラヌ中ノ名ヲカケハ十
レヌル我ソカ十三キ又先帝ノ常ニ弾スル琵琶

ヲ見テ

見ルヘ、ニ泪ソカ、ル四ノ緒ノ行末十カキ

子ニツタヘテモ又先帝ノ宸華ノ裏ニ理趣経ヲ
書テ達智門院詠ス

イワサリキコノ水クキノ十カレテモ残ル形
見ノ跡ト見ヨトハ宗良親王遠州井伊ノ城ニ在テ
先帝ノ崩スルヲ風ニ聞テ悲歎メ深山ノ住居ワ
ヒシク長月ノ末時而際十キニ庭ノ紅葉一葉ツ
ミソヘ和歌ヲ詠三四條別當資次ヘ送ル

思フニハ猶色淺キ紅葉カ十ソナタノ山ハイ
カ、時雨ル、返歌資次

葉トカシル宗良親王吉野ヘ赴シトストイヘ凡
世上靜ナラス患ヘテ詠ス

ヨクレシト思ニシ道モカニナキハコノ世ノ
外ノミヨシ野ノ山爰ニ於テ遠江国人宗良背
キ三河国足助重春迎ヘ奉テ役ニトス宗良心ヲ
定メス其答ニ

一筋ニ思ニサダメスハ橋ノクモテニ身ヲモ
ナケク以哉ト云ツカハシテ爰ニ至テ宗良駿河
國ニ赴ク国人狩野介貞長及入江神原等属シテ
暫爰ニ苗ル又信州ヘ赴シト志ス然ルニ同国貞

長カ館ニ奥良親王居スト聞テコレヲ訪ワル干
時富士山ノ景氣妙ナルヲ都人願望アラシト山
ノカタチヲ畫セ二條為定ノ方ヘ送ルトテ詠ス
見セハヤ十カタラハサラニ言ノ葉ノヲヨハ
又富士ノ高根成ケリ返歌為定

思ニヤル方サヘナキニ言ノ葉ノオヨハ又富
士ト聞ニツケテモ今年北畠源大納言親房神皇
正統記五卷ヲ作テ常陸国ヨリ吉野へ献ス

奥國二年北京應三年新帝吉野ヲ帝都トトイヘ凡
行宮殿閣十ヶ月卿雲客微少昇進除目殆断絶セ

シトス於是ニ月下旬源親房常陸小田城ニ居ス
職原抄ニ卷ヲ作テ吉野へ献シ奉ル百官諸位職
掌ヲ指カ如ニ末代ニ至テ帝都ノ亀鑑ト云ツヘ
シ親房博職才学マリ今東國ニ在テ文書ノ一卷
モ不役シテ輒ク是ヲ頭ス只凡人ノ所作ニ非ス
爰ニ至テ親房兵士ヲ遣シ宇都宮絅武ヲ殺ス四
月義助勅ヲ受テ南海ニ赴キ四国ヲ平ケニトス
五月義助伊豫國ニテ病死細川頼春四国ヲ従ヘ
平均北越ニテ味方ニ属スル兵士軍ヲ起ス八月
奥州ノ宮号宇津峯ノ宮常州小田城ニ入春日中將頭時

一條少將具信唐橋肥後守經泰刑部大輔秀仲等
供奉ス時ニ至テ官軍ニ應スル伊達宮内少捕石
橋川村六郎田村庄司南部滴石等兵ヲ發ニ斯波
岩手兩郡ヲ攻テ蘹貫出羽守及一族共ヲ討捕ル
今年ニ至テ宗良親王駿河國ニ在トイ一氏義兵
ヲ起スヘキ所ニアラストテ則去ニト欲スル時
狩野介貞長等各残ヲ惜ミ行末ニ至テ忠ヲ盡ス
ヘキト云フ是ヲ感メ詠ス

身ライカニ駿河ノ国ノ奥津浪ヨルヘ十三ト
テクチハナレ十八清見閑ニ至テ其眺望ヲ覗テ
東路ノ末ニテ行スイホサキノ清見カ閑モ秋
風ノ吹車回ト云フ所ヨリ甲州ニ到テ信州へ赴
ク富士山ノ麓ヲ通ルトテ其山ヲ褒テ
北ニ十三南ニ十三テ今日幾日富士ノフモト
ヲメクリ来ヌラン甲州白須ノ松原ニ休テ
カリソメノ行通路ト聞シカトイサヤシラス
ノ待人モ十三信濃国ニ著テ送リノ族ヲ還スト
テ駿河ノ人ノ方へ讀テ遣ス

富士ノ根ノ煙ヲ見テモ君トヘヨアサマノ嶽
ハイカ、萌ユ十ト同國大河原ニ至ル香坂高宗

等属メコレラ賞ス冬ニ至テ北国ノ兵士南朝ニ

心ラ通スル族アリ宗良招ニ応シ潛ニ越中国石

黒某力館ニ赴キ寺泊ニ至テ帰鴈ヲ聞テ

故郷ト聞シコシヂノ空ラタニ猶浦トヲカ

ヘル鴈金

ぬ国三年

北京曆
応四年

八月廿八日官軍勢州田丸城ニ

楯篋ル高土佐守師秋コレラ攻落ス宗良親王越

中國ニ在テ詠ス

カソフレハセトセモースタノニコシナノノ

ヤシロノカケラハナレテ同国名子浦ニ潜ニ居

メ京師一赴ク人ニ讀テ為定カ方一遣ス

イタツラニ行テハ帰ル鴈ハアレト都ノ人ノ

コトツテハナシ

今ハ又トヒクル人モ名子ノ浦ニシホタレテス

ムアニトシラナン返歌為定

音ニナケハソレカトハキカテ行鴈ノコトツ

テナシト何才モフラン

秋ノ風ハヤ吹カヘセ名子ノアニノシホタレ

コロモウラミノコサテ同国ニテ宗良帰鴈ヲ聞

テ

才ナシクハチルテヲ見テカヘル鴈花ノ都
ノ支カタラナ

奥国四年北京康永二月召堂宮内少輔入道秀慶

謀テ白川結城親朝其子顯朝一告テ武家ニ属ス
ヘシト頗ニ催促ス又御教書數通是ヲ贈ルト雖
一毛曾テ往ハス三月廿九日常州閔城小甲城ヲ
武家方佐竹結城相馬等兵ヲ發シコレヲ攻ル春
日中將一條少将及小田治久等各是ヲ拒四月ニ
日敵ノ軍將結城直朝十九歳其外佐竹一族百餘輩
戦死ス同五日頭時伊佐城ヲ出テ密ニ計謀ニテ

伏兵ヲ以テ敵ノ糧ノ道路ヲ遮ル是ニ依テ武家

方悉ク敗北ス五月廿二日高三河守師冬鎌倉
執事

軍兵ヲ催シ閔城小田城ヲ攻ント發向ス六月十
四日既ニ穂庄ニ至テ同十五日小田近邊三村山
ニ陳ス未タ矢ヲ發タス勝負ヲ決セス後ニ日ヲ
経ル同廿三日城兵出テ戦フ終日ニ及フ敵討死
瘋ヲ蒙ル者凡千餘人師冬戦ニ疲し退去廿四日
城兵志發スト雖一毛敵敢テ戦ハス雙軍以野伏
戦而已七月十二日親朝道忠力子欣然ハ此時任
大蔵少欽修理大夫ハ前任一品官秀仲ニ命シテ

白川親朝修理権太夫ニ任ス同十三日ニ合戦味
方軍ニ利ヲ得タリ又常州北郡新城ニテ軍アリ
味方小田一旗完戸田野ノ輦多以討死ス然ニ師
冬河内郡駒城ニ至テ退ク廿七日師冬軍兵ヲ發
シ夜討ス味方戦死スル者多シトイヘニ敵
敗ス同サ八日八町目垣本鷺宮善光寺山四ヶ所
ノ敵ノ要害ヲ敗テ放火ス廿九日飯沼館没落其
夜間者ヲ以テ師冬カ止スル陣屋ヲ悉ク焼拂フ
敵敗走九月師冬再ニ収向ス味方長治某忽ニ心
ヨ魏シテ武家方トナル時ニ至テ親房暨頭時ヨ

|| 白川親朝父子一頻ニ加兵ヲ詰トイヘニ不果

十月小田治久心寢シ師冬ト和順シテ敵トナル
是ニ依テ一品宮及北畠親房春日中將頭時具信
秀仲等閑城ニ移ル一品宮頭信ハ又下妻城ニ至
ル十一月三日師冬佐竹小田等引率シ田村木庄
ニ屯ス同八日師冬軍士ヲ収三閑城ヲ攻ル兵ヲ
少テ大宝坊下妻城ト称ス北寺山ヘ収メ兩城閑下ノ通妻
路ヲ塞ク旦ツ三戸七郎軍将トメ大平高橋武州
常州ノ諸兵數千騎大宝坊ニ進テ南長峯ニ陳ス
是ニ於テ頭信具信勇士ヲ従ヘ出城ノ戦ニ敵ヲ

敗ル然ルニ伊佐城伊達宮内大輔行朝コレヲ守
真壁城法超入道コレヲ守ル中郡城西明寺城皆
兵士多ク指籠ル田村庄四保城四保駿河守コレ
ニ居ス各高朝ニ属ス四保城而已味方ノ諸城ニ陽テ敵
道ヲ遮ル故力盡キ駿河守城ヲ遁出テ妻ト兵ニ
剃髪ス其子回幡守降参師冬ニ謁メ田村本領安
堵ス月迫ニ至テ師冬兵ヲ引テ小田城ニ帰ル今
年十二月尊氏ノ母藤清子卒上杉頼重女也

興国五年永二年北京康春宗良親王越州ヨリ信州ニ帰

ル大河原ノ奥山ニ居ス千時詠ス

カリノ宿カヘハカリノ吳竹ノアリシツノ
トマ鳴ノナク

春毎ニアヒ宿リセン鳴モ竹ノ菌生ニワレシ
タフラン顯信奥州ニ在テ兵士ラ催ストイヘニ
国人曾テ応セス刺ヘ結城親朝味方ラ背キ潛ニ
師冬ニ通シ正月十三日遂ニ敵トナル

興國七年北京貞和元年備前兒島ノ三宅高徳等脇屋義
助力子義治ヲ取立竊ニ京ヘ上リ尊氏直義ヲ夜
討セント謀ル更頭テ信濃國一逃去ル七月ノ比
天変故於大内祭神大神宮ヘノ奉幣使

正平元年北京貞和二年三月花山院後三位左中將長親
兼左大辯祖父師賢父時兼
並左大弁例ト云千時長親詠和歌

親ノラマノタメシヲ見ツル我身武君ノ君十
ル代ニツカフトテ今年北京ニ風雅集ヲ撰ス宗
良親王コレヲ聞テ是ヨリ先ニ續後拾遺集ヲ撰
シ時聊ノ障リアリテ作者ニ洩ス今又田舎ニア
リ撰者モ為定卿ハ洩ス此道モスタリ行ト歎キ
テ

イカナレハ身ハシモ十ラスコトノ葉ノウツ
モシテノミキコヘサルラン

此度ハカキモラストモモシホ中中く和歌
ノウラミトハセシ爰ニ至テ信州大河原ニ年月
ヲ経ルイツヲ期スヘキト寔ス香坂高宗等力忠
義モ空ク十ラニト愁一テ

イハテ思フ谷ノ心モクルシキハ身ヲムモレ

木トスクリスナリケリ

正平二年北京貞和三年武家方奥州結城白川郡正頭朝
相馬某伊賀式部入道大軍ヲ以テ藤口靈山田村
宇津峯等ノ各南朝諸城ヲ攻ル城兵悉敗ス七月
廿七日洞院中約言公行実世カ男剃髮ス

正平三年

北京貞和四年

楠

正行

父正成

カ遺跡不違無二

ノ忠功ヲ励

ニス故ニ

兵ヲ起ス

正月ハ日

尊氏高

師泰

三テ

南方ヲ擊

ニト欲ニ

東條城ニ至ルニ

月六日於春木谷師泰ト楠ト合戦五月十五日於

野村武家方波輪助重与横山某ト合戦八月正行

軍ヲ率シ河内ヨリ摂州ニ出張尊氏ヨリ細川頸

氏ヲシテ討シム於藤井寺合戦頭氏敗軍佐ニ未

六郎左衛門栗田小太郎村田六郎猶崎等ノ兵士

悉討死正行勝ニ乗テ潛ニ京一上リ尊氏直義

館ヲ俄ニ攻ル故不能防戦尊氏ハ免テ江州一逃

行直義ハ兼テ地道ヲ堀テ置ケル故其道ヨリ逃

出ル於爰正行河内へ帰ル尊氏直義帰洛九月三

日河州宮里同國風森於所ニ正行合戦毎度軍ニ

利ヲ得スト云夏十三渡邊孫十郎等ノ諸兵若干

討取ル十月廿日摂州池田ノ城ニヲヒテ正行戦テ

又敵ラ破ル正行カ勇カ世舉テ是ヲ廢ム戦一ハ
勝攻レハ取ル同月廿八日北帝即位崇光院ト称
ス十一月廿五日尊氏命シテ山名時氏細川顯氏
ラメ正行ラ擊天王寺住吉ニ至テ屯ス正行住吉
ニ急ニ馳テ戦テ山名カ軍ラ破ル時氏疵ラ蒙ル
其弟參河守及原四郎二郎大飯六郎日加田馬淵
等ノ勇士悉ク戦死同十二月十四日高師直師泰
諸兵ラ帥テ八幡山崎ニ陳ス同廿七日楠其弟正
時吉野一參ル

正平四年和五年正月二日高師直以大軍飯森山

ノ簾於四條繩手正行ト合戦ス正行以兵術武威
ヲ勵ニ大敵ラキ破テ師直殆危シ南次郎左衛門
松田次郎左衛門上山六郎左衛門等ノ諸卒戦死
スル者甚タ多シ師直能拒ムユヘ楠カ軍散シテ
正行矢ニ中テ死ス歳廿六年其弟正時并一族四十
三人同所ニ戦死ス師直進シテ吉野ニ攻入後村
上帝加名生山ヘ走ル吉野内裏炎上師直帰京ス
住吉ニ至テ和歌ラ詠ス師直

天クタルアラ人カミノミルシアリ世ニタカ
キ名ノアラワレニケリ師泰河内ノ石川河原ニ

陣ス正行カ第正儀残兵ヲ發メ對陣ス三月十五
日於寺田師泰ト正儀ト合戦同十八日於山田戦
フ十九日佐保田ニテ軍アリ四月廿二日曰野高
岡合戦師泰正儀未雌雄ヲ決セス八月直義ト師
直ト隙アリ於是直義政務ヲ止ラル上杉重能畠
山直宗思逆ノ張本タルニ依テ師直コレラ殺ス
十月尊氏ノ長男義詮鎌倉ヨリ上洛直義ニ替リ
テ政ヲ行フ師直權ヲ恣ニス義詮ノ弟基氏ヲ餽
倉ノ為管領高師冬上杉憲顯其家老タリ十二月
直義剃髮號惠源

正平五年北京応元観春新待賢門院先帝ノ御廟昔ラ
慕ヒ塔尾御陵ニ参ル座主堂其外坊舍兵火ノ為
ニ回禄ス然レニ花ハ昔ニ替ラス哀レニ覺ヘテ
一房消息ノ内ニ入レ宗良親王一送ルトテ
三吉野ハ見シニモアラスマレニケリアク十
ル花ハ猶ノコレトモ御返夏宗良

ケマヤ花ニソフラン

尋見ル人ノ為ニヤ残シケンオナシカサシノ

三吉野ノ花同御陵ノ邊ニ櫻ヲ千本植シト誓シ

テ年くニ植花ノ咲タルヲ見テ栗田久盛朝臣コレヲ詠ス

植ヲカハ苔ノ下ニモ三吉罪ノ御幸ノアトヲ
花ヤ残サニ夏足利直冬尊氏落胤ノ子尊氏常ニ疎ム故
惠源取立於筑紫テ兵ヲ起ス石見国人三角入道
コレニ属ス六月三日武家ヨリ高師泰ヲシテ石
見国ヲ擊ツ八月十三日直冬於肥後兵ヲ起シ同
廿五日官軍ノ守ル所ノ石州鞍崎城者杉城ヲ攻
テ拔ク佐和善四郎等自殺九月廿五日奥州白河
ノ住人結城三河守其兄大蔵大輔ヲ背テ再ヒ南
朝ニ属ス故顯信ト通メ石堂藏人入道秀慶ト戦
フ十月尊氏及師直大軍ヲ將ニ直冬為誅伐ニ西
國ニ赴ク義詮京ヲ警固ス惠源潛ニ京ヲ出ル十
二月九日惠源吉野一降參則大將ノ宣旨ヲ賜ル
同月廿五日鈴倉基氏ト師冬ト不快師冬鈴倉沒
若甲州柘溪城ニ至ル廿六日上杉能憲師ヲ帥テ
師冬ト攻戦フ其後上杉憲頭一人為鈴倉ノ執吏於是畠山国清モ
其一族直宗誅セラル、ニ依テ武家ヲ背テ南朝
一降參與州管領畠山高国其子国氏モ武家ヲ背
テ南朝一降テ同国吉良右京大夫貞家ト合戦上

杉重能養子民部少輔能憲其一族朝房ト共ニ二
百騎ヲ從一上洛シテ惠源ニ属ス

正平六年北京觀応二年正月惠源南方ノ軍兵ヲ催シ京

ヲ攻ニトス桃井直常コレニ應シ北国ヨリ攻上

ル尊氏帰京メ合戦直常敗軍然レ凡人皆師直ヲ

悪ニテ惠源ニ従フ故尊氏西國一落行正月十七

日甲州伴野村柄渓城ニテ能憲及諫訪祝部カ為

ニ師冬殺サル此月於備中國師泰ト上杉朝房合

戦朝房破壊ス二月撫州光明寺小清水所ニノ軍

ニ尊氏師直軍敗レ惠源利ヲ得タリ尊氏師直松

岡ノ城ニ篭リ既ニ自害セントス是時惠源ト和睦

尊氏志心源義詮皆帰洛師直師泰剃髪ノ降参路次

ニテ二人共ニ殺ス其一族皆所ニテ殺サル同

月十二日奥州岩切城ヲ貞家攻破テ畠山高国其

子国氏并遊佐等自害後類百餘人自殺ス三月廿

四日於奥州源頭信ト吉良貞家合戦頭信軍敗レ

田村庄宇津峯城ニ入ル播州赤松則祐南朝護良

ノ子陸良ヲ取立大将ニセント兵ヲ催ス頃仁木

細川土岐佐木ト尊氏方石堂上杉桃井惠源各武

威ヲ論メ不快七月廿五日和泉国陶呂城ノ官軍

出張同月尊氏惠源再ニ不和惠源北国へ赴ク八
月四日泉州井山城南朝渋輪彦太郎助重武家
ラ戻メ井山ノ城ラ攻テ戦フ同五日三州本野原ニ
於テ富永高龜同直資ト方惠源富永直龜合戦高龜
直資敗軍メ戦死ス八月尊氏北国へ赴シトス九
月六日於泉州佐野城南方ノ兵ト京ノ軍士桃三
戦フ毎日合戦不止既ニ十八日ニ至ル又官軍ノ
籠井山城守兵ラ戻シ戦フ更同十八日ヨリ十一
月廿五日ニ至テ軍果サス九月十七日惠源相山
ニ陣ス蒲生野ニ於テ合戦尊氏ノ兵渡邊左衛門
尉榮討死惠源ノ兵秋山新蔵人光啟戦死ス於爰
畠山国清入道道誓尊氏ニ降參十月八日惠源北
国ヨリ閑東ニ赴キ鎌倉ニ入ル十三日尊氏閑東
進戻義詮京守護タリ同十六日泉州井山城合戦
同廿三日興州柴田郡倉本川ニ於テ伊達飛彈守
行朝田村庄司南朝相馬親胤吉良貞家合戦十一
月尊氏駿州薩埵山ニ陣ス惠源大軍ヲ以テ圍之
十二月宇都宮氏綱武家ト挑井長尾方惠源上州名
波庄ニ於テ合戦宇都宮公綱薬師寺公義等尊氏
ニ應メ薩埵山後攻ス惠源大ニ敗レテ尊氏ニ降

参尊氏コレヲ携テ鎌倉ニ入ル此間京都兵少ク
危キニ依テ義詮南帝へ和睦後村上帝偽テ許容
ス依之觀應二年ヲ改メ南朝ノ年号正平六年ヲ
用ユニ條閔白良基ヲ初トメ百官皆吉野（參ル
吉野伺公ノ輩皆官位昇進北畠大納言源親房准
后ノ宣旨ヲ蒙ル（南帝ノ舅
勲功有故）此月奥州ニ於テ五辻
源少納言右馬頭清顯（南朝
方）ト石堂入道秀慶（武家
方）

合戰石堂等敗軍

正平七年（北京文和元年）義詮砂金ヲ南帝へ献ス正月六
日尊氏（王丸）末子基氏（童名稱）惠源コレヲ育フ二月
廿六日惠源卒年四十二宗良親王東國ニ在テ吉
野ノ行宮ヲ他所ニ遷サル、ト聞テ先朝ノ遺跡
イト遠サカル夏ヲ愁ヘテ和歌ヲ詠シ主上一奉

ル

タラチ子ノ守リヲソフル三吉野ノ山ヲハイ
ツチ立ハナルヲ御返夏後村上帝

故卿トカリニミ山ハ出ヌレト親ノモリハ
猶キアルラニ今年二月後村上帝吉野ヲ出住吉
一行き幸住吉ヲ皇居ト定ム同十四日津守国夏叙
正三位同十九日後村上帝八幡一行き幸於是伊勢

國司源頭能兵ヲ將ニテ来ル俄ニ頭能楠正儀等
ラノ京ヲ襲フ義詮江州一出奔細川頼春討死頼
カ家僕四国ヨリ斐ス討死ヲ聞テ町田筒
井湯浅川等自殺ス是ヲ殉死ノ始トス頭能勅
ヲ詣テ上洛ノ持明院殿一参リ本院嚴新院光明主
上崇東宮直ラ車ニ乗セ奉リ吉野ノ奥加名生ニ
押篋奉ル千時三種ノ神罟南方一取奉リ北帝ヲ
称太上天皇三條実春典藥頭篤直八條実音吉野
一供奉於爰平安城ニ主ナクメ荒廢メ地トナレ
リ兵乱亦續ケルユヘニ御禊ノ大嘗會モ行レス
頃矣宗良親王補中務卿征夷大將軍ノ宣旨アリ
勅使由良入道信阿弥也宗良親王年ヲ経テ遠国
ニ住テ都ノ手振ヲモ忘レ弓馬ノ業ラミニテ征
夷將軍ノ宣旨ヲ蒙リシモ不思議ニ覺ヘテ
思ニキヤチモフサリシ梓弓ヲキフシワカ
スナレニモノトハ且ツ年宗良信州ニ居シテ都
ヘ讀

思ニヤレ木曾ノ三カサモ雲トヘル山ノコ十
タノ五月雨ノコロ姑捨山ノ邊ニテ月ヲ見テ
是ニス都ノツトハ十キモノライサトイフ
ハマラハステノ月闰二月宗良親王武藏国ニ赴

ク小手差原ニ至テ諸軍ヲ指揮シテ兵ヲ勇テ讀
テケル

君カタメ世ノタメ何カオシカラニステ、カ
ヒアル命ナリヤハ同サ八日宗良及新田義宗義
奥義治師ヲ帥ヒテ金井原小手差原ニテ合戦尊
氏防戦ス新田敗ルトイ一屯義奥義治鎌倉ニ攻
入基氏出奔義宗臼井崎ニテ尊氏ト戦フ義宗撃
負越後^(支)尊氏又鎌倉ヲ攻ム義奥義治退テ
川村城ニ入る三月六日大内介弘幸南朝卒ス同
サ八日埋峯河曲口合戦官軍敗ラル宗良親主東
夷ヲ征ス宣旨アリテ東山東海ニ籌策ラメノラ
ス干時寄海祝ト云フ支^(支)ヲ詠ス

四方ノ海野十カニモワキテシツカナレワカ
オサム一キ浦ノ浪風三月義詮諸兵ヲ催シ上洛
ハ幡ヲ攻テ度ニ合戦楠勇カヲ勵シ和田某戦功
アリ土岐頼名等ヲ討捕ル此月十八日伯耆國ニ
於テ長年カ残黨兵ヲ起シ船上山城ヲ守テ南方
ニ忠ヲ盡ス京方ノ軍士コレヲ攻ル城兵律師長
信等戦死ス四月三日伯州ニ於テ合戦備中守行
実左京進高政等官方ノ兵士多シ以テ討死ス同

九日奥州国司顕信及田村左司伊達飛彈守兵戸
起ス吉良貞家相馬胤頼国魂隆秀等殺メ安積郡
戸谷田佐、河矢柄所、合戦同廿五日ハ幡城合

戦伯耆兵庫助長氏等ノ城兵戦死ス五月十一日
ノ夜南方ノ軍敗レ後村上帝ハ幡ヲ落ル路次ニ

於テ参議実勝四條大納言隆資等タク以テ討死

ス七月三日奥州田村庄久野原ニ才ニテ官軍ト
吉良貞家合戦九日矢柄城ニ於テ又戦フ八月七
日宇津峯城陷ル一品ノ宮顕信清顕秀仲顕時没
落吉野ノ奥加名生ニ於テ八条大納言実音八月

十五夜和歌ヲ詠シ内大臣公秀へ送ル

ツルミヤニヘノ秋返歌公秀

長月マウキ世ヲアキノ月見テモフカキミヤ

ニラ思ニコソヤレ八月十七日北帝後光嚴院即

位

正平八年北京文和二年正月十日備前国岡山ニ於テ南

朝ノ兵上神太郎兵衛尉高直戦死ス同月遠州乾

ノ住人天野周防前司良王宗良親王子号遠州官生捕

携テ上洛ス二月持明院殿回禄五月七日山名時

氏其子師氏謀叛ノ南朝方ト成テ伯耆国ヲ出ツ
六月山名吉野ノ官軍ト牒シ合セ京へ攻上ル北
帝ヲ義詮伴ニ奉リ東国一落行ク同十二日西山
谷ノ堂ニ於テ武蔵將監戦死ス新田掃部助等堅
田ニ戻向既ニ敵追来ル佐ニ木秀綱道誉
カ子討死ス
爰ニ於テ北帝ヲ細川清氏カ背ニ負テ濃州樽井
ニ暫皇居トス義詮勢ヲ聚メ山名ヲ討ニトス山
名父子勢ニ盡キ伯耆一帰ル北帝帰洛七月畠山
安房守国清鍾倉ノ管領トナル足利直冬南朝ニ
応シ大将ト成ル

正平九年和三年
北京文二月二日後村上勅ノ能登國惣
持寺宗曹洞勅願所ノ宣旨アリ新田義貞脇屋義治
川村城ヲ出奔尊氏帰洛ス仁木左京大夫頼章ヲ
武家ノ執事職トス義詮戻メ山名ヲ討ツ山名コ
レヲ聞テ直冬ヲ迎テ戦フ越前ノ足利高経越中
ノ桃井直常モ武家ニ恨アリテ直冬ニ從テ南朝
ニ属ニ北国ヨリ攻上ラント約ス十二月山名伯
州ヲ戻ス

正平十年和四年
北京文正月北帝ヲ尊氏伴ニ奉リ江州
ニ着行シ直冬及。桃井足利等入洛二月四日尊氏

東國ノ兵ヲ催シ東坂本ニ陣ス同八日細川清
氏ト北國ノ兵戦テ二宮兵庫助討死ス又仁木
ト桃井ト合戦義詮西国ノ兵ヲ催神南ニ陣ス山名
ト戦フ師氏疵ヲ蒙リ敗軍直冬東寺城ニ籠テ尊氏
ト戦フ三月十五日武家方奈須五郎及後兵寃竟ノ者
戦死ス同月南方ノ糧絶テ直冬時氏高経直常皆
本国ニ帰ル尊氏義詮帰京五月廿一日伊賀国ニ
於テ官軍ノ春日部判官高貞凶徒ノ為ニ討ル北
畠大納言守親頭信_{次男}奥州国司ニ任ス干時_奥爰ニ
於テ白川禪正少弼武家ト合戦守親和歌ヲ詠ス
陸奥ノアタキノニユ三取初テソノヨニツカ
マナラ十ヶキツ、

正平十七年北京延文元年正月二條為忠和歌二首天野
行宮へ捧テ奉ル

君スメハ峯ニモラニモ家居メ深山十カラノ
都ナリケリ

世ニ出テハニカリソフヘキ月影ラニタ山フ
カキ雲ノ上カ十後村上長親ニ勅アリテ四条隆
資ニ贈左大臣從一位

正平十二年北京延文ニ年二月光嚴法皇光明院崇光院

直仁親王皆後村上帝ノ免アリテ吉野ノ奥山ヨリ帰京シ給フ花山院右大將兼文章博士長親和

歌ヲ詠ス

ヨモニキヤ華ノ林ノ花ノ香ヲ我袖ニサヘウツスヘシトハ洞院相國公泰剃髪覺元ト号ス冷入道相國ト号十二月主上御方違ノタメ行幸ノ時光明臺院入道前閑白左大臣詠ス

ニチニタル君カ御幸ニ色ソ一テ老木ノ松モ

春ヤシラニシ

正平十三年北京延文三年四月十八日南朝ニ於テ新侍

賢門院薨ス後村上ノ國母阿野公廣女初三位局ト号ス又准后ト称ス同月廿

九日尊氏薨ス年五十四建武三年ヨリ延文三年ニテ

治世廿三年此時武田伊豆守信氏剃髪シテ和歌

ヲ詠ス

梓弓モトノ貌ハニキカヘス入ヘキ山ノカクレカモ十三五月五日雨フル義註詠ス

袖ノ色カワルトキケハタニコロモ立カ一リテモナラツツユケキ此日千秋三河藏人高範和歌ヲ詠シ南朝ノ儒家首範カ方一送ル

時ミモアレ袖ニウキ子ヲカケソヘテ雨モ十

ミタモハレヌソラカ十六月三日尊氏ニ贈左大臣徒一位爰ニ於テ義詮和歌ヲ以テ勅言ス

帰ル一キ道シ十ケレハクラ井山ノホルニツケテヌル、袖カ十七月十九日征西將軍懷良親王尊氏薨スルヲ聞テ兵ヲ起ス太宰少貳ト合戦北畠中納言信親春日大納言頭時洞院大納言菊池武明同武信暨ニ新田一族堀口掃部助江田丹後守等悉ク戦死ス頃年菊池武光元未南朝ニ属シ懷良親王ヲ仰ク故新田氏族其餘諸國ノ南方ニ応スル兵士來テ菊池ヲ賴ム者多シ八月十九日南朝ニ於テ左大臣実世薨ス五十月鎮倉管領基氏及執事畠山国清入道、誓計テ新田義貞ヲ殺ス其外新田ノ一族所ニ於テ悉ク平ク十月六日四條三位高宗夜討ノ為ニ殺サル十一月菊池武光兵ヲ起シ九州大半役フ十二月義詮征夷大將軍ノ宣下アリ今年宗良親王新侍賢門院薨スルヲ聞テ愁ノ餘ニ先年花ニ添テ賜ル消息ヲ取出シミホメル花ヲ見テイト哀ラモヨホシ尋テモ今又誰カ三吉野ノ花ノムカシラワレニカタラン

正平十四年北京延文四年南朝二條教基閑白ト十ル師基

ノ師基ハ剃髪ス北畠准后親房薨ス年六十七中院一
呂ト号ス十月仁木頼章死ス細川相模守清氏武
家ノ執吏ト成ル同八日畠山道誓基氏ノ名代ト
メ東國ノ大軍ヲ率シ上洛十一月義詮ニ南朝ヲ
攻ニ更ラ進ム十二月義詮及道誓數十万騎ノ兵
ヲ以テ南方へ収向サ三日義詮尼崎ニ陣ズ楠正
儀和田正武コレヲ拒ク南帝山中観心寺ニ幸ス
正平十五年北京延文五年三月ヨリ京勢関東勢南方へ
収ス畠山道誓四月三日紀州龍門山城戦フ城兵
塩治伊勢守討死畠山敗軍同十一日芳賀等重テ
収向和州人越智某降參ス同十二日住吉社鳴動
同十八日吉野ニ於テ陸良親王護良子逆心メ内裏
ヲ焼ク二條師基コレヲ攻ル陸良戦負テ殺サル
同廿九日細川清氏志松範実龍泉寺城ヲ拔ク五
月志坂城楠正儀守ルトイ一に力盡キ自火ヲ放
テ退去ス同五日新侍賢門院三年ノ服終ル日菖
蒲ニ寄セテ御製衣阿野大納言実為ニ賜ル
モシラテ過シカ十三サ御返支実為

アヤメラモシラテ過コシ 程ヨリモ今日コソ

サラニ音ラハソ一ツレ同月南帝觀心寺ニ皇居
ス深山ニテ攻ル吏十ラス楠和田金剛山ノ奥ニ
隠ル故同サハ日義詮并道誓帰洛ス干時仁木義

長頼章道誓ト不和七月南方ノ兵士蜂起ス道誓

清氏戻向天王寺ニ至テ既ニ義長ヲ擊ニトス義
長急キ義詮ノ館ニ来テ強テ道誓清氏追討ノ御
教書ヲ乞受任執吏職於爰佐ニ木道舉力謀ニテ

義詮女ノ姿ニ変メ館ヲ出西山ノ谷ノ堂ニ落行
ク回茲義長勢盡キ伊勢ニ落行ノ義詮帰洛楠正

儀譽田城ヲ攻テ拔ク山本田邊阿瀬川等湯川庄

司コレラ攻落ス山名時氏蜂起山陰道ヲ擊ツ道

誓清氏帰洛又南方兵ヲ戻ス道誓功十キヲ耻テ

八月潛ニ閑東一赴ク九月再ニ住吉ニ行幸皇后
トス爰ニ於テ社頭ノ松ト云フ吏ヲ入道前閑白

左大臣詠ス

千代ラ又カサ子テキキレ御幸シテフタ、ニ

ナル、住吉ノ松返歌

今見テモラモホユルカ十ラクレニシ君カニ

カケヤ花ニソフラン、今年東國ノ遠徒攻メ來テ

行宮モ危シ宗良親王コレヲ聞テ急キ進發セニ
トス干時幾程ナク擊後一又住吉ニ行幸故京師
ニ攻入結ヌ信州ヨリ兵ヲ催シ早ク来ルヘシト
勅アリ然レモ秋冬ニ至テ果サス曰茲再ニ勅ア
リテ御製賜ル

イツテカ我ノミニトリ住吉ノトハスウラ

ミラ君ニ残サニ御返歌宗良

我急ク心ラシラハ住吉ノツヒサシサラウ
ラミサラニシ

正平十六年北元年六月十八日九州博方ニ才ニ

テ征西將軍懷良親王及菊池武光軍士ヲ發ス大
友刑部太輔大宰少貳冬資馳向テ戦フ少貳冬資
直資等戦死ス八月ニ至テ合戦止ス七月十二日
山名時氏美作一出張志松ト戦フ八月菊池ト大
友等ノ戦ニ遂ニ大友敗軍ス九月廿八日楠正儀
摂州ニ出張佐ニ木秀誼ト合戦佐ニ木敗軍秀誼
兄弟渡邊白江源二瓜生次郎左衛門等ノ軍士凡
二百七十三人戦死ス是月武家ノ執事細川清氏
ト佐ニ木道譽權ヲ諍ソ遂ニ清氏反逆ニ成テ都
ラ没落十月清氏南朝一降參大將ノ宣旨ヲ蒙ル

同月後村上帝住吉ノ社行幸神主修理權大夫津
守國量叙正四位下干時御製

位山越テモ更ニ思ニシレ神モニカリラソフ
ル代ソトハ又供奉ノ人風流ノ破子ヲ奉ノ與ヲ
催ス神主國量八十島ノ祭ノカタヲ作り捧奉ル

時御製

ミソキスル八十島カケテイニシメヤ浪ラサ
ニレル時ハニヘケリ十一月閏東畠山道誓基氏
ニ背テ豆州一没落十二月三日官軍二條師基四
條隆俊石堂頼房細川清氏楠正儀和田正武湯浅
山本恩地桂川等ノ軍士ヲ殺ニ都一攻入同八日
北帝義詮佯テ江州一著行ク官軍入洛義詮ノ館
ヲ放火ス同月廿四日義詮武佐ニ至テ軍士ヲ聚
ム廿六日官軍京ヲ去ル廿九日義詮歸京

正平十七年北京貞治元年正月清氏阿波国ニ赴ク四国
ラ平ク二月斯波義將武家ノ執事職ニ補ス足利
入道朝カ末子或將壯年故道朝支ノ行ノ三月十三日北帝江州ヨ
リ京ニ遷幸西園寺寔俊カ館ヲ皇居トス四月十
九日内裏ニ遷ル六月三日直冬山名時氏中國ニ
出張七月細川頼之四国ニ才ニテ清氏ト合戦清

氏軍敗レ討死立次郎左衛門鈴木孫七郎司行長
戦死ス於是頼之四国悉ク平ク八月後村上帝住
吉行宮ヨリ宗良親王一御製信州一送ル十五夜
ノ月ヲ歟覧アリテ

年経ヌルヒ十ノスニヒノアキハアレト月ハ
ミヤコト思ニタニヤレ御返支宗良
イカ、セシ月モ都トニカリソフ君住ノ江ノ
アキノユカシサ又

月ニ君思ニ出ケリアキフカシワレラハステ
ノ山ト十ヶクニ九月道朝カニ男氏経九州ノ探
題ニ任シ下向ス菊池武光コレヲ擊敗ル氏経剣

髪ノ帰活

正平十八年北京貞治二年正月十三日三州竹嶋合戦後
村上帝住吉行宮ヨリ吉野ニ還幸六月春日神木
入活南朝権大納言公夏コレヲ聞テ秋ニ至テ詠

ス

神モ又今年ノ秋ハ旅寐シテ思ニイツラニ春
日野ノ月八月十六日莊嚴淨土寺ニテ御八講行
レケル夜月陰ル時御制衣
秋ヲ經テ月マハサノミクモルヘキニタカキ

クル、イサヨニノ空ハ月廿日基氏鎌倉ヲ建ル
上杉憲頭入道桂山管領トス是時上杉ト芳賀不
和故芳賀反ス同廿六日基氏兵ヲ収三武州岩殿
山ニテ芳賀伊賀守高貞入道禪可ト合戦高貞其
弟駿河守敗軍基氏コレヲ遂フ野州天王ノ宿ニ
至ル宇都宮頗ニ和ラ諸フ於爰基氏帰ル於南朝
阿野実為任内大臣叙從一位

正平十九年

北京貞治三年

春大内介弘世武家ニ降參厚

東駿河守宮方トカリテ菊池ニ応ス故大内介豊
後国ニ來テ合戦弘世敗軍シテ上洛山名時氏武

家ニ降參ス仁木義長モ同降參ス畠山道誓閏東
ヨリ河内ニ潛ニ來テ南朝一降參セントス楠等
許容セス故流浪シテ死ヌ七月廿七日上野国世
良田伊豫守義政基氏ヲ背ク故追討ス廿八日於
如来堂義政自害ス

正平二十年

北京貞治四年

五月四日故尊氏後室卒

相模橋

守久八月佐木道譽并諸大名武家ノ執事道朝
時々八月佐木道譽并諸大名武家ノ執事道朝
ヲ説ス依之同五日道朝赴越前後京追討使ヲ遣
ス宗良親王従信州吉野宮へ和歌三百六十首ヲ
詠シコレヲ奉ル

正平二十一年北京負治五年二月廿七日莊嚴淨土寺御

八講執行ノ日雪降ル御製衣内府家賢ニ賜ル

思ニヤレサカ野ノ春ノ雪ニモヤ消ケルツミ
ノ程ハ見ユラン御返夏家賢
ヲシム十ヨ法ノムニロハ春ノ雪消ラン露ノ
タメシナリセハ七月於越前道朝卒其子義將降
参

正平二十二年北京負治六年二月閏東官方平一揆兵ヲ

起テ武州川越城ニ楯篋基氏コレラ聞テ追伐セ
ント欲ス干時病アリ故其子全王九九歳為名代襲

向ノ川越城ヲ攻ル四月廿六日基氏卒年廿六閏六

月十七日川越城ヲ抜ク城兵平一揆勢州一支ル

其子孫閑也全王丸進テ宇都宮ノ城ヲ攻ル城主宇都宮

氏綱降參九川細川賴之武家ノ執事職ニ補ス十

二月七日武將義詮薨年三十八此年無文和尚後醍醐皇子

入唐徑山ニ登ル

正平二十三年北京忘安元年義滿十一為武家棟梁三月

廿六日上杉憲頭閑東下向九月十九日憲頭上州

足利ノ陣所ニ於テ卒ス上杉能憲同朝房鎌倉

執事トス十一月廿一日鎌倉全王丸服氏滿ト

号ス南朝ニ於テ右大將長親源氏物語抄ヲ作ル
十二月廿日義滿征東大將軍ノ宣旨アリ

正平二十四年北京応永二年正月楠正儀武家一可降参
ト告ル二月十五日左馬頭満詮義滿弟十一年歲武州本田
ノ陣ニ下向春主上御不豫干時宗良親王信州ニ
在リ消息ニ御製衣ヲ添コレヲ賜ル

メクリアフニ賴ミソシラヌ命タニアラハト
タノム程ノハカ十サ御返夏宗良

メクリ逢ニ賴ミマル一キ君カ代ニヒトリ差
タル身ライカニセニ又遍照光院入道前太政大

臣讀テ宗良一送ル

曰ニムカニ月ニワスレヌ心ラハタ、十カソ
ラニ思ヒヤランナニ返歌宗良

思ニヤリ歎キテクラス心ラハ月日モシラヌ
時ヤマルラニ三月十一日吉卯ノ行宮ニ於テ後
村上帝崩ス年四十三如意輪寺ニ葬ス先帝後醍醐依
遺勅在世ノ内讓位セス又剃髪セス先帝ノ年号
ヲ用ニス於爰太子熙成親王受禪号後龜山院藤
冬実閔白ト成二條教基男右大將長親父内府薨メ三
年ノ喪未滿亦先帝素服ヲ賜ル悲歎メ和歌ヲ詠

三年ニテホサヌ十三タノ藤衣コハ又イカニ
染ル袂ヲ同月土御門右大臣顕信剃髪四月楠正
俊入洛義満ニ謁ス五月五日菖蒲ニ寄テ新宣陽宣ガ
門院詠之

ケフハ又アヤメノ巾ニ引カヘテウキ子ソカ
ルシイ紫ノ袖返歌嘉喜門院

オニハスニアヤメモシラヌシイ紫ノ袖ニ憂
子ノカールヘシトハ閔白左大臣先帝ノ患アル
支ラ慕ニテ和歌ヲ詠ス

今ハ又涙ニナシテツ、ムカ十袖ニアリシ

君カメクミラ九月北畠内大臣顕信ノ從兵等勢
州ニテ土岐大膳大夫ト合戦土岐カ兵敗北顕能
續テ三重郡ノ諸城ヲ攻取ル此月越中ニ於テ義
将ト桃井合戦直常破テ国人皆武家ニ属ス十
月十三日満詮武州ヨリ帰京上杉禪正少弼朝房
畠山右衛門佐基国入道得本武州本田ノ陣ヨリ
信州ニ發向國ニ大河原ノ城ニ中務卿宗良親秀
レラ守テ滋野一族香坂高宗木曾上杉莘属之於
是合戦十月ヨリ十二月下旬ニ至テ戦不止シテ

雌雄不決既寒氣甚深雪故双軍屈シテ互ニ兵ヲ
引於是宗良親王吉野ノ行宮ニ至ラント欲シ信
州ヲ覈ス香坂高宗等頻ニコレヲ止ムトイヘ
聞スメ民部卿光資ヲ大河原城ニ残ス高宗猶モ
属ス宗良兼テ志ス支モ違寔メ中途ニ迷フ時和

歌ヲ詠ス

シハシタニフカス間モカ十風ノミニタツチ
リノミノアリカサタメテ既ニ美濃國ニ至テ犬
山ヨリ鳴海ノ浦近ク出テ海邊ヲ見テ是ヲ詠ス

山路ヨリ残邊ノ里ニ今日ハ來テウラメツラ

シキ旅衣カ十宗良又信州ニ帰ル今年細川頼之
南朝一奏メモトノコトク持明院殿ト大覺寺殿
代ニ在位アリテ三種神罣北朝ニ渡御南北和睦
シテ南帝上洛アリテ公家武家本領如古官位不
可有違変ト再三雖奏南朝公武共ニ曾テ不応此
時南朝ニ属スル国大和河内紀伊和泉伊賀伊勢
志摩飛彈信濃上野越後越中伊豫備前石見長門
肥後日向大隅薩摩都テセケ国加之北国宗良
親王九州ニ懷良親王勢州ニ北畠国司ア



